

八郎潟調整池北部の鳥類とその生態*

Ecological notes of the Avifauna in Northern part of Hachiro-gata Regulating Reservoir, Akita Prefecture

高橋 一郎**

Ichiro TAKAHASHI

I はじめに

八郎潟の鳥類相に関する報告は、井上・西出(1965)が最初であり、つづいて秋田県の委託事業として秋田県野鳥の会が実施した秋田県鳥類分布調査(1)(1972)、同(5)(1976)、同(6)(1977)、同(7)(1978)および岸(1985)があげられる。これらの報文に記録された全鳥類は、40科169種におよんでいる。

筆者は、ガンカモ類の渡来地として知られている八郎潟の、干拓後に残された最大水域である八郎潟調整池に焦点をあて、ここに生息する鳥類について調査した。したがって、鳥類の多くは、水鳥および水辺の鳥であり、他は、堤防の緑地帯に生息する草原性の鳥類などである。通年調査により、同地内の鳥類について若干の知見を得たので、ここに報告する。

起稿にあたり、終始懇篤なご指導を賜り、論文校閲の労をとられた秋田大学教育学部教授小笠原 暁 博士に心からお礼申しあげます。

II 調査地の概要

かつては琵琶湖に次いで本邦第2の水面域をもった八郎潟も、1964年には干拓され、現在は、八郎潟調整池をはじめ、東西の承水路や中央幹線排水路など、わずか4,795haが水域として残されているにすぎない。しかも、日本海に通じる船越水道を遮断するかたちで設置された防潮水門により、海水の流入が少なくなり、潟の水質は、徐々に淡水化している。

調査地である八郎潟調整池は、図1に示すように、かつての八郎潟の南部がそのまま残された水域であり、最深部で約3mと比較的浅く、底にはヘドロと称されるシルトおよび粘土などが厚く堆積している。湖岸は、

図2にみられるように、干拓時に敷設された大形の碎石が水際と接し、部分的にヨシなどが繁茂している。その外側は、コンクリートの堤防、さらに堤防のり面緑化のために植栽された草地が続いている。調整池は、農業用水を確保する水源地であるばかりでなく、干拓以前から続いた内水面漁業の操業地でもある。したがって、船外機をつけた漁船が往来するほか、随所に漁網が張りめぐらされている。

III 調査方法

調査は、図1に示すように、八郎潟調整池北側の堤防沿いに、大潟橋から南部排水機場までの10km間を、1km毎に11か所の観察点を定め、堤防際の草地から湖面までに出現するすべての鳥類を記録しようと、毎月下旬に1回、1月・2月の結氷期を除く1986年9月から1987年12月まで実施した。なお、湖面の調査域は、図1に示すように、堤防からの直線距離で約1km以内とした。これは、湖上に生息する水鳥の識別が可能な範囲と考えたからである。あらかじめ地図上に区域を定めた後、20倍の望遠鏡(Carton SPOT 60 MODEL No.880)で距離を特定し、確認しながら実施した。

鳥類の識別および個体数の算定にあたっては、9倍の双眼鏡と20倍の望遠鏡を併用した。

IV 結果と考察

調査結果の整理にあたっては、次のように処理した。結氷期の1・2月を除く9月から翌年12月までの調査ではあったが、鳥類の季節的な変化を連続的にとらえるため、3月から始まり12月をもって終了するようにした。しかし反面、9~12月の結果は、2か年分2回

* 本稿の一部は、1987年11月29日、秋田生物学会において発表した。

** 秋田県立博物館

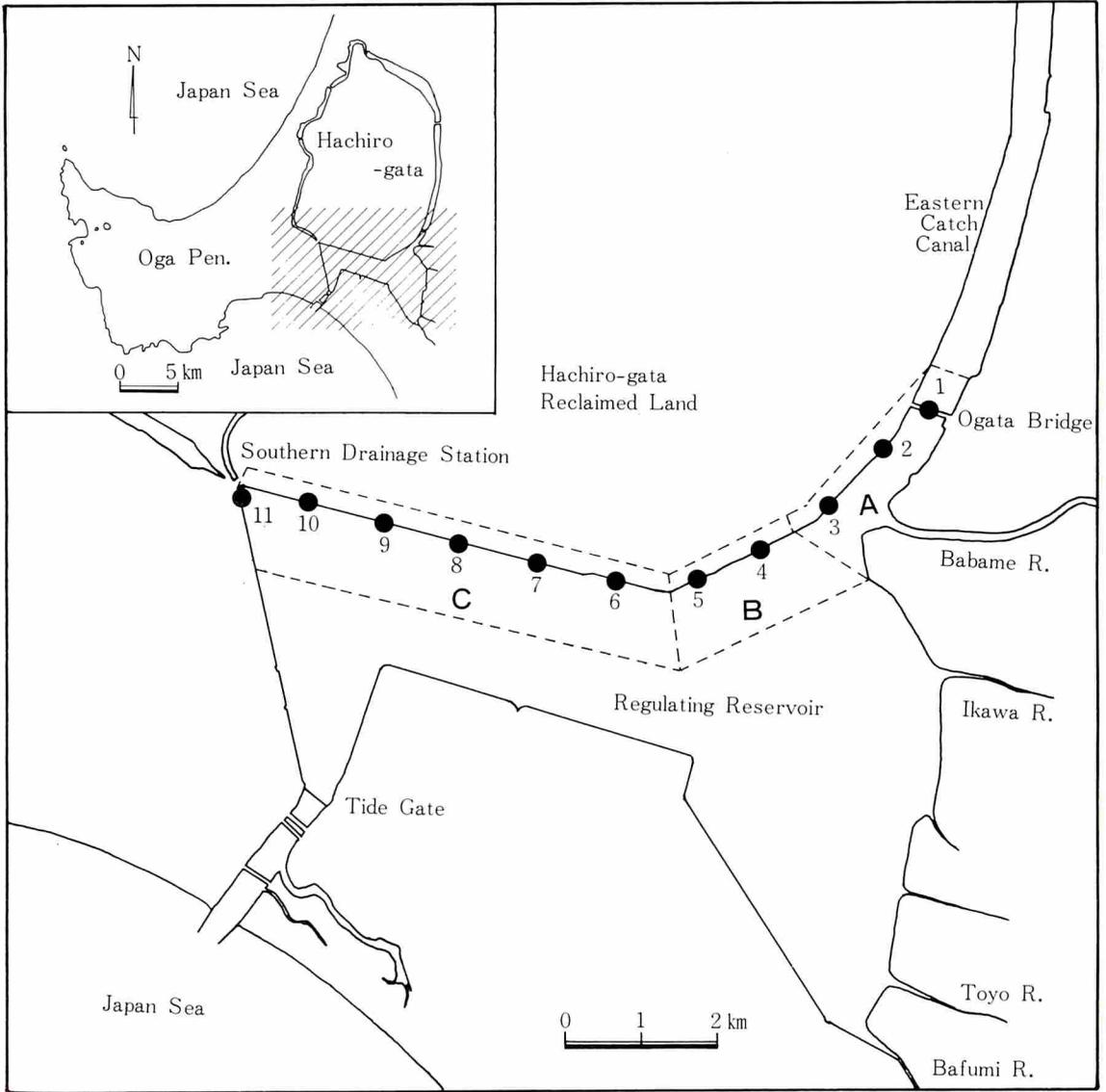


図1 調査地付近の概要図

Fig. 1 Showing the map of Hachiro-gata regulating reservoir, Akita Pref., and the investigated area.

の調査結果になり、出現個体数を比較するうえで繁雑になる。そこで、便宜的に個体数を1回分に平均化し、小数点以下の数値は切り上げることにした。

1. 鳥類相の概要

調査期間中に確認した鳥類は、表1に示すように、25科74種である。これらの鳥類は、湖面、湖岸、堤防際の草地のそれぞれの自然環境によって、おおよそ特徴づけられる。表2に示すように、主に湖面およびそ

の上空で観察した鳥類は、カイツブリ類、ガンカモ類、カモメ類などの5科28種であり、主に湖岸で観察した鳥類は、サギ類、シギ・チドリ類、トビ、カラス類などの13科29種である。他の17種は、主に堤防際の草地で認めたキジバト、ヒバリ、カワラヒワ、ムクドリなどである。

日本海に接し、かつ馬場目川や豊川などの流入河川を有する八郎潟の地形的な特徴から、湖面および湖岸



図2 調整池北岸の状況

Fig.2 Showing the photograph of the northern shore in the regulating reservoir

で確認した鳥類は、内陸部を主生息地としている種類と沿岸部から海洋部にかけてを主生息地としている種類が入り混じっている。

カイツブリ類の場合、カイツブリは、結氷期を除き通年生息し、しかも当地で繁殖する内陸性の種類であるが、他のハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリの3種は、個体数は少ないものの、主に冬期に観察される沿岸性の鳥類である。

カモ類についてみれば、確認された14種中、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモの6種は、陸ガモと称される淡水性のカモ類であり、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、クロガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサの8種は、海ガモと称される潜水性のカモ類である。

カモメ類は、一応海鳥にまとめられるが、秋田県では、河川づたいに内陸部でも観察されている。当地でも、ユリカモメ、カモメ、ウミネコの3種は、出現頻度の高い鳥類として観察された。なお、佐藤(1979)は、ウミネコが当地に近い男鹿市双六の弁天島といわれる小島で繁殖することを報じている。

常時出現し、留鳥として扱ってよい鳥類は、カイツブリ、トビ、ハシボソガラスの3種であるが、10か月中9か月と出現頻度の高いカルガモ、オオバン、ハクセキレイ、スズメの4種も留鳥と考えてよい。繁殖あるいは繁殖していると思われる種類は、カイツブリ、ヨシゴイ、オオヨシゴイ、カルガモ、バン、オオバン、

ヒバリ、ハクセキレイ、コヨシキリ、オオヨシキリの10種である。

年間を通じて出現個体数が多い種類は、キンクロハジロ、オナガガモ、カルガモ、ホオジロガモなどであるが、カルガモを除くこれらの鳥類は、生息時期が10月から4月までの冬期間に集中している。

当地における鳥相は、夏期の繁殖鳥類、冬期のカモ類および採餌のために飛来するトビ、カラス類によって特徴づけられている。餌場として知られる八郎潟であることから、特にカモ類の動態についてみれば、10月と11~12月および3~4月にそれぞれ相違がある。図3に示す月別優占種にみるように、10月は、キンクロハジロ、オナガガモで89.3%を占めるが、11~12月は、スズガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモが、3~4月は、マガモ、キンクロハジロ、カルガモが優占している。キンクロハジロが当地における代表的な種類であることもわかるが、11~12月に多く出現する種類は、潜水性のカモ類である。さらに、表3に示す月別総出現個体数によれば、10月が34,895羽と最高であるが、続く11月の890羽、12月の738羽と激減しているのがわかる。これは、キンクロハジロ、オナガガモ、マガモ、カルガモの減少が顕著であることによるものである。11・12月は、10月に比して、全体に個体数が減少傾向を示すが、その反面、スズガモ、ホオジロガモ、カワアイサは、増加している。これらの変化の原因は、11月15日から始まる狩猟解禁にあると考えられる。増加傾向を示す種類に共通していることは、いず

表1 八郎潟調整池北部の鳥類目録

Tab.1 A list of birds observed on the northern part of Hachiro-gata Regulating Reservoir.

- Family PODICIPITIDAE
 1. *Podiceps ruficollis* カイツブリ
 2. *P. nigricollis* ハジロカイツブリ
 3. *P. auritus* ミミカイツブリ
 4. *P. grisegena* アカエリカイツブリ
- F. PHALACROCORACIDAE
 5. *Phalacrocorax filamentosus*
 ウミウ
- F. ARDEIDAE
 6. *Ixobrychus sinensis* ヨシゴイ
 7. *I. eurhythmus* オオヨシゴイ
 8. *Nycticorax nycticorax* ゴイサギ
 9. *Butorides striatus* ササゴイ
 10. *Bubulcus ibis* アマサギ
 11. *Egretta alba* ダイサギ
 12. *Ardea cinerea* アオサギ
- F. ANATIDAE
 13. *Anser fabalis* ヒンクイ
 14. *Cygnus cygnus* オオハクチョウ
 15. *Anas platyrhynchos* マガモ
 16. *A. poecilorhyncha* カルガモ
 17. *A. crecca* コガモ
 18. *A. penelope* ヒドリガモ
 19. *A. acuta* オナガガモ
 20. *A. clypeata* ハンビロガモ
 21. *Aythya ferina* ホンハジロ
 22. *A. fuligula* キンクロハジロ
 23. *A. marila* スズガモ
 24. *Melanitta nigra* クロガモ
 25. *Bucephala clangula* ホオジロガモ
 26. *Mergus albellus* ミコアイサ
 27. *M. serrator* ウミアイサ
 28. *M. merganser* カワアイサ
- F. ACCIPITRIDAE
 29. *Milvus migrans* トビ
 30. *Buteo buteo* ノスリ
 31. *Circus aeruginosus* チュウヒ
- F. FALCONIDAE
 32. *Falco subbuteo* チゴハヤブサ
 33. *F. tinnunculus* チョウゲンボウ
- F. RALLIDAE
 34. *Rallus aquaticus* クイナ
 35. *Gallinula chloropus* バン
 36. *Fulica atra* オオバン
- F. CHARADRIIDAE
 37. *Microsarcops cinereus* ケリ
- F. SCOLOPACIDAE
 38. *Tringa erythropus* ツルシギ
 39. *T. glareola* タカブシギ
 40. *T. hypoleucos* イソシギ
 41. *Numenius madagascariensis*
 ホウロクシギ
42. *Gallinago gallinago* タシギ
 43. *G. hardwickii* オオジシギ
- F. PHALAROPODIDAE
 44. *Phalaropus lobatus*
 アカエリヒレアシシギ
- F. LARIDAE
 45. *Larus ridibundus* ユリカモメ
 46. *L. argentatus* セグロカモメ
 47. *L. canus* カモメ
 48. *L. crassirostris* ウミネコ
 49. *Sterna albifrons* コアジサン
- F. COLUMBIDAE
 50. *Streptopelia orientalis* キジバト
- F. CUCULIDAE
 51. *Cuculus canorus* カッコウ
- F. ALCEDINIDAE
 52. *Alcedo atthis* カワセミ
- F. ALAUDIDAE
 53. *Alauda arvensis* ヒバリ
- F. HIRUNDINIDAE
 54. *Riparia riparia* ショウドウツバメ
 55. *Hirundo rustica* ツバメ
- F. MOTACILLIDAE
 56. *Motacilla alba* ハクセキレイ
- F. LANIIDAE
 57. *Lanius bucephalus* モズ
- F. MUSCICAPIDAE
 58. *Saxicola torquata* ノビタキ
 59. *Turdus pallidus* シロハラ
 60. *Acrocephalus bistrigiceps*
 コヨシキリ
61. *A. arundinaceus* オオヨシキリ
- F. PARIDAE
 62. *Parus major* シジュウカラ
- F. EMBERIZIDAE
 63. *Emberiza cioides* ホオジロ
 64. *E. yessoensis* コジュリン
 65. *E. rustica* カンラダカ
 66. *E. spodocephala* アオジ
 67. *E. schoeniclus* オオジュリン
- F. FRINGILLIDAE
 68. *Carduelis sinica* カワラヒワ
 69. *Leucosticte arctoa* ハギマシロ
- F. PLOCEIDAE
 70. *Passer rutilans* ニュウナイズメ
 71. *P. montanus* スズメ
- F. STURNIDAE
 72. *Sturnus cineraceus* ムクドリ
- F. CORVIDAE
 73. *Corvus corone* ハンボソガラス
 74. *C. macrorhynchos* ハシブトガラス

八郎潟調整池北部の鳥類とその生態

表2 調査結果

Tab. 2 Census results

No.	Species	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	Total	Lake	Shore	Grass-land	A	B	C
1	カイツブリ	1	14	10	37	54	103	50	14	12	5	300	○			●	●	●
2	ハジロカイツブリ				1			2				5	○			●	●	●
3	ミミカイツブリ								4	1	4	9	○			●	●	●
4	アカエリカイツブリ									3	1	4	○			●	●	●
5	ウミウ		1								1	2	○			●	●	●
6	ヨシゴイ				7		2					9		○		●	●	●
7	オオヨシゴイ				2			2				4		○		●	●	●
8	ゴイスギ							1				1		○		●	●	●
9	ササゴイ			2	4	1	10					17		○		●	●	●
10	アマサギ		1									1		○		●	●	●
11	ダイサギ		3									3		○		●	●	●
12	アオサギ			3			6	9				18		○		●	●	●
13	ヒシクイ	7										7	○			●	●	●
14	オオハクチョウ								2	8	6	16	○			●	●	●
15	マガモ	1147	640	2	2	1			2032			3824	○			●	●	●
16	カルカモ	464	324	106	75	705	219	234	1227	1		3355	○			●	●	●
17	コカモ	98	178	1	1				16	6	1	301	○			●	●	●
18	ヒドリガモ	28	59	4								91	○			●	●	●
19	オナカガモ	78	140		7		2	14	8505	5	1	8752	○			●	●	●
20	ハンビロガモ	3	1						3			7	○			●	●	●
21	ホンハジロ	78							140	57	1	276	○			●	●	●
22	キンクロハジロ	757	973		7	3		3	22638	254	28	24663	○			●	●	●
23	スズガモ	101	11					1	92	302	3	510	○			●	●	●
24	クロガモ	3										3	○			●	●	●
25	ホオジロガモ	1								131	572	704	○			●	●	●
26	ミコアイサ	5								2	27	34	○			●	●	●
27	ウミアイサ			1			1				1	3	○			●	●	●
28	カワアイサ				2					32	1	35	○			●	●	●
29	トビ	10	6	39	57	36	47	24	6	11	8	244		○		●	●	●
30	ノスリ	1	1	2	1				3	5	5	18			○	●	●	●
31	チュウヒ	1							1	2	1	5			○	●	●	●
32	チコハヤブサ							1				1			○	●	●	●
33	チョウゲンボウ										1	1			○	●	●	●
34	クイナ								2			2			○	●	●	●
35	バン		1	2	2		2	2				9	○			●	●	●
36	オオバン	32	18	8	9	18	10	39	29		2	165	○			●	●	●
37	ケリ		2	2	1	24						29			○	●	●	●
38	ツルシギ		7									7			○	●	●	●
39	タカブシギ		5									5			○	●	●	●
40	イソシギ						7		2			9			○	●	●	●
41	ホウロクシギ		8				3					11			○	●	●	●
42	タンキ				1					1		2			○	●	●	●
43	オオジシギ				2							2			○	●	●	●
44	アカエリヒレアシシギ		2									2			○	●	●	●
45	ユリカモメ	45	86	34			152	233	103	23	12	688	○			●	●	●
46	セグロカモメ	7									3	10	○			●	●	●
47	カモメ	4		3			6	96		2	29	140	○			●	●	●
48	ウミネコ				14	80	73	21	9	6		203	○			●	●	●
49	コアジサシ			2	1			5				8	○			●	●	●
50	キジバト			9	30	26	3	1				69			○	●	●	●
51	カウコウ				2	1						3			○	●	●	●
52	カワセミ		1				1	1				3			○	●	●	●
53	ヒバリ	26	24	43	14	30	7		4			148			○	●	●	●
54	シヨウドウツバメ								127			127			○	●	●	●
55	ツバメ		4		23	31	89	119				266			○	●	●	●
56	ハクセキレイ	4	7	5	9	5	16	4	5	1		56			○	●	●	●
57	モズ		1	2			1	1			1	6			○	●	●	●
58	ノビタキ								1			1			○	●	●	●
59	シロハラ										1	1			○	●	●	●
60	コヨシキリ				1	4	4					9			○	●	●	●
61	オオヨシキリ			21	33	5	1	1				61			○	●	●	●
62	シジュウカラ									1		1			○	●	●	●
63	ホオシロ						1			1	5	7			○	●	●	●
64	コジュリン						3					3			○	●	●	●
65	カシラダカ								4	7		11			○	●	●	●
66	アオシ									1		1			○	●	●	●
67	オオジュリン			3								3			○	●	●	●
68	カワラヒワ		4	8	20	26	15	2		1		76			○	●	●	●
69	ハキマシコ										2	2			○	●	●	●
70	ニュウナイスズメ						283	25				308			○	●	●	●
71	スズメ	4	4	3	26	5	8		1	1	4	56			○	●	●	●
72	ムクドリ		2	6	160	12	151	117	40	3		491			○	●	●	●
73	ハンボツガラス	7	1	9	11	15	26	93	12	8	8	190			○	●	●	●
74	ハンブトガラス	3	1		2		2	8	7	1	4	28			○	●	●	●

3 月	マガモ 39.3%	キンクロハジロ 26.0%	カルガモ 15.9%	他	
4 月	キンクロハジロ 38.5%	マガモ 25.3%	カルガモ 12.8%	他	
5 月	カルガモ 32.1%	ヒバリ 13.0%	トビ 11.8%	ユリカモメ 10.3%	他
6 月	ムクドリ 28.1%	カルガモ 13.2%	トビ 10.0%	他	
7 月	カルガモ 65.2%	他			
8 月	ニューナイズメ 22.6%	カルガモ 17.5%	ユリカモメ 12.2%	ムクドリ 12.1%	他
9 月	カルガモ 18.8%	ユリカモメ 18.7%	ショウドウツバメ 10.2%	他	
10 月	キンクロハジロ 64.9%	オナガガモ 24.4%	他		
11 月	スズガモ 33.9%	キンクロハジロ 28.5%	ホオジロガモ 14.7%	他	
12 月	ホオジロガモ 77.5%	他			

図3 月別優占種

Fig. 3 Monthly changes of the relative number in the dominant species.

れも潜水性のカモ類であり、その特質が狩猟圧に対する安全度を高めているように思う。狩猟期を終えた3～4月には、カモ類は、再び集結傾向をみせるが、渡来時に比し、その個体数は少ない。

渡辺(1980)は、信濃川大河津分水域に出現するカモ類を、渡来期、越冬期、渡去期、越夏期に区分し、渡来期出現型と渡去期出現型および両期出現型に類別している。この手法を当地のカモ類に適用したところ、次の結果を得た。ただし、各月を旬間で算定した渡辺(1980)に近似させるため、渡来期を9～10月、渡去期を3～4月として処理した。各期の個体数は、表4に示すとおりであり、それを渡来期個体数と渡去期個体数の比率でみる出現型にまとめると、

表3 月別出現種数と出現個体数

Tab.3 Monthly changes in the number of species and individuals.

	No. of species	No. of individuals
Mar.	9科26種	2,915羽
Apr.	18科31種	2,529
May	17科27種	330
Jun.	19科33種	569
Jul.	17科20種	1,082
Aug.	19科30種	1,250
Sep.	18科33種	1,244
Oct.	11科24種	34,895
Nov.	11科30種	890
Dec.	13科29種	738

渡来期出現型：オナガガモ(9.8:0.2)、ホシハジロ(6.4:3.6)、キンクロハジロ(9.3:0.7)、カルガモ(6.5:3.5)

渡去期出現型：コガモ(0.5:9.5)

ヒドリガモ(0:1)

両期出現型：マガモ(5.3:4.7)

スズガモ(4.5:5.5)

となる。渡辺(1980)は、コガモを渡来期に、オナガガモを渡去期に類別しており、この点のみがまったく逆転するほどの比率で異なっている。内陸部の河川と海岸部に近接する当地との環境差による季節的な変動の違いと思われるが、カモ類の動態を把握するうえでの貴重ながかりであり、各地の状況を精査する必要がある。

今回の調査中、冬鳥として扱われるカモ類の夏期出現が見られたので特記したい。マガモの6・8月、コガモの6月、オナガガモの6・8月、キンクロハジロの6・7月、ウミアイサの5・8月がそれぞれである。全国的にみれば珍しい例ではないが、近年、各地でカモ

表4 カモ類の出現種と季節別個体数
Tab.4 Seasonal changes of Ducks.

種名	渡去期（3-4月）	渡来期（9-10月）	越冬期（11-12月）
マガモ	1,787羽	2,032羽	0羽
カルガモ	788	1,461	1
コガモ	276	16	7
ヒドリガモ	87	0	0
オナガガモ	218	8,519	6
ハシビロガモ	4	3	0
ホシハジロ	78	140	58
キンクロハジロ	1,730	22,641	282
スズガモ	112	93	305
クロガモ	3	0	0
ホオジロガモ	1	0	703
ミコアイサ	5	0	29
ウミアイサ	0	0	1
カワアイサ	0	0	33

類の繁殖が報じられているので、一応注目すべき事例ではないかと考える。

2. 分布状況

調査地である大潟橋から南部排水機場までの距離は10kmであり、調査域は約12.1km²である。この帯状の調査地内に鳥類は一樣に分布しているわけではない。そこで、調査地番号1～3に相当し、馬場目川河口部を含む東部承水路南側の2.4km²（A区）と調査地番号4～5に相当し、調整池中最大の水域であり、井川、豊川、馬踏川などの流入河川が多い調整池東側の北部2.6km²（B区）、さらに、調査地番号6～11に相当し、日本海に通じる船越水道につながる調整池西側の北部7.1km²（C区）に分けて、それぞれの分布状況を把握しようとした。

その結果、図4にみる月別優占種は、全域のそれと大差はないが、表5に示すように、出現種数と個体数および密度に関しては若干の相違がある。出現種数はC区が多く、全種数の89.2%にあたる23科66種を記録している。種数の少ないB区は、58.3%にあたる21科

42種であり、C区に比し、サギ類、カモ類中のアイサ属、草索性鳥類などの減少が顕著である。出現個体数が多い地区は、最多出現種数を示すC区であったが、密度（羽/km²）で比較すれば、A区が4,504.2、B区が2,689.6、C区が4,004.4となり、わずかの差ではあるがA区がC区より高い。各月毎に密度をみれば、繁殖期である4～8月はA区がもっとも高密度となり、9月以後は規則性がなく、特にカモ類の個体数変動によるところが大きい。

そこで、表6・図5に示すように、当地の代表的な繁殖種であるカイツブリとオオパンの、そして代表的なカモ類6種の各区毎の月別密度をみることにした。繁殖期のカイツブリは、圧倒的にA区が高密度であるが、繁殖終期から家族期に相当する8・9月にはA区からB区へと分布を広げ、10月以後は低密度で全域に分散している。オオパンも同様にA区の密度が高いが、B区にも比較的高い密度で分布しており、むしろ5・10月はA区より高密度になる。しかし、C区にはほとんど出現していない。これは、A区の西岸が他区に比

	東部承水路南側 (A区)		調整池東側 (B区)		調整池西側 (C区)				
3月	キンクロハジロ 50.8%	スズガモ 13.1%	他	カルガモ 50.7%	キンクロハジロ 12.2%	オナガガモ 11.7%	マガモ 58.8%	キンクロハジロ 25.9%	他
4月	マガモ 47.0%	キンクロハジロ 35.2%	他	キンクロハジロ 24.7%	コガモ 21.7%	オナガガモ 20.0%	カマガモ 17.6%	マガモ 13.1%	他
5月	カルガモ 40.2%	トビ 11.5%	ヒバリ 10.3%	他	カルガモ 26.4%	トビ 11.3%	ユリカモメ 17.4%	トビ 12.1%	ヒバリ 10.5%
6月	カイヅブリ 16.4%	カルガモ 14.3%	ツバメ 12.1%	他	トビ 18.5%	キジバト 18.5%	ムクドリ 14.4%	カルガモ 14.4%	他
7月	カルガモ 35.7%	ウミネコ 15.5%	カイヅブリ 10.9%	他	カルガモ 58.4%	ウミネコ 13.3%	他	他	他
8月	ムクドリ 28.2%	ユリカモメ 25.9%	カイヅブリ 14.5%	他	カルガモ 24.0%	ユリカモメ 20.8%	カイヅブリ 18.4%	ムクドリ 16.4%	他
9月	ユリカモメ 21.6%	カルガモ 20.3%	オオバン 16.4%	ショウドウツバメ 15.2%	他	ムクドリ 22.7%	ハンボソガラス 16.8%	カルガモ 16.0%	カモメ 15.0%
10月	オナガガモ 94.3%	他	他	マガモ 53.1%	キンクロハジロ 20.6%	オナガガモ 13.2%	他	他	他
11月	スズガモ 54.5%	他	他	キンクロハジロ 46.4%	スズガモ 30.7%	ホオジロ 10.1%	他	他	他
12月	カモメ 31.5%	ホオジロ 13.0%	ユリカモメ 11.1%	他	ホオジロ 97.0%	マガモ 97.0%	他	他	他

図4 各区域毎の月別優占種

Fig. 4 Monthly changes of the relative number in the dominant species at each investigated area.

八郎潟調整池北部の鳥類とその生態

表5 各区毎の出現種数、出現個体数、密度

Tab.5 Monthly changes in the number of species and individuals, and in the density at each investigated area.

	Number of species			Number of individuals			Density (No./km ²)		
	A	B	C	A	B	C	A (2.4km ²)	B (2.6km ²)	C (7.1km ²)
Mar.	7科19種	5科13種	8科18種	374羽	665羽	1,876羽	155.8	255.8	264.2
Apr.	11科17種	6科11種	16科27種	930	571	1,028	387.5	219.6	144.8
May	11科14種	11科11種	14科22種	87	53	190	36.3	20.4	26.8
Jun.	17科25種	12科12種	16科25種	140	54	375	58.3	20.8	52.8
Jul.	15科15種	10科11種	13科15種	322	113	647	134.2	43.5	91.1
Aug.	12科18種	12科16種	17科23種	344	250	656	143.3	96.2	92.4
Sep.	12科18種	13科18種	14科24種	231	488	532	96.3	187.7	74.9
Oct.	7科12種	8科16種	8科17種	8,491	3,798	22,612	3,537.9	1,460.8	3,184.8
Nov.	8科16種	6科12種	8科25種	77	534	288	32.1	205.4	40.6
Dec.	7科12種	6科11種	7科22種	54	467	227	22.5	179.6	32.0
Total	20科50種	21科42種	23科66種	11,050	6,993	28,431	4,604.2	2,689.6	4,004.4

表6 主な水鳥の各区域における密度変化 (単位は 羽/km²)

Tab.6 Monthly changes in the density of some water birds at each investigated area (In No./km²)

カイヅブリ <i>Podiceps ruficollis</i>											
	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
A	0	2.9	2.5	9.6	14.6	20.8	7.9	2.1	1.3	0	
B	0	0.8	0.4	1.6	0.4	17.7	11.2	0.4	1.5	0.4	
C	0.1	0.7	0.4	1.4	2.5	1.0	0.3	1.1	0.7	0.6	

マガモ <i>Anas platyrhynchos</i>											
	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
A	0.8	182.1	0	0	0	0	0	0	0	0	
B	15.8	26.2	0	0	0	0	0	775.0	0	0	
C	155.5	19.0	0.3	0.3	0.1	0	0	2.5	0	0	

オオバン <i>Fulica atra</i>											
	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
A	13.3	6.3	1.3	3.3	7.5	4.2	15.9	5.0	0	0.8	
B	0	1.2	1.9	0.4	0	0	0	6.9	0	0	
C	0	0	0	0	0	0	0.1	0	0	0	

キンクロハジロ <i>Aythya fuligula</i>											
	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
A	79.2	136.3	0	2.5	0	0	0	77.1	0.8	1.3	
B	31.2	54.2	0	0	1.2	0	1.2	300.8	95.4	0	
C	68.5	71.1	0	0.1	0	0	0	352.4	0.6	3.7	

カルガモ <i>Anas poecilorhyncha</i>											
	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
A	6.7	30.0	14.6	8.3	47.9	10.4	19.6	60.9	0	0	
B	129.6	27.3	5.4	0.4	25.4	23.1	30.0	103.5	0	0	
C	15.6	25.5	8.0	7.6	73.8	18.9	15.5	114.4	0.1	0	

スズガモ <i>Aythya marila</i>											
	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
A	20.4	2.5	0	0	0	0	0	0	17.5	0.4	
B	0	0	0	0	0	0	0	29.2	63.1	0	
C	7.3	0.7	0	0	0	0	0.1	2.3	13.8	0.3	

オナガガモ <i>Anas acuta</i>											
	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
A	0	4.2	0	2.9	0	0.8	5.0	335.4	0	0	
B	30.0	43.8	0	0	0	0	0	192.3	0	0.4	
C	0	2.3	0	0	0	0	0.3	0	0.7	0	

ホオジロガモ <i>Bucephala clangula</i>											
	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	
A	0.4	0	0	0	0	0	0	0	2.9	2.9	
B	0	0	0	0	0	0	0	0	20.8	174.2	
C	0	0	0	0	0	0	0	0	10.1	16.6	

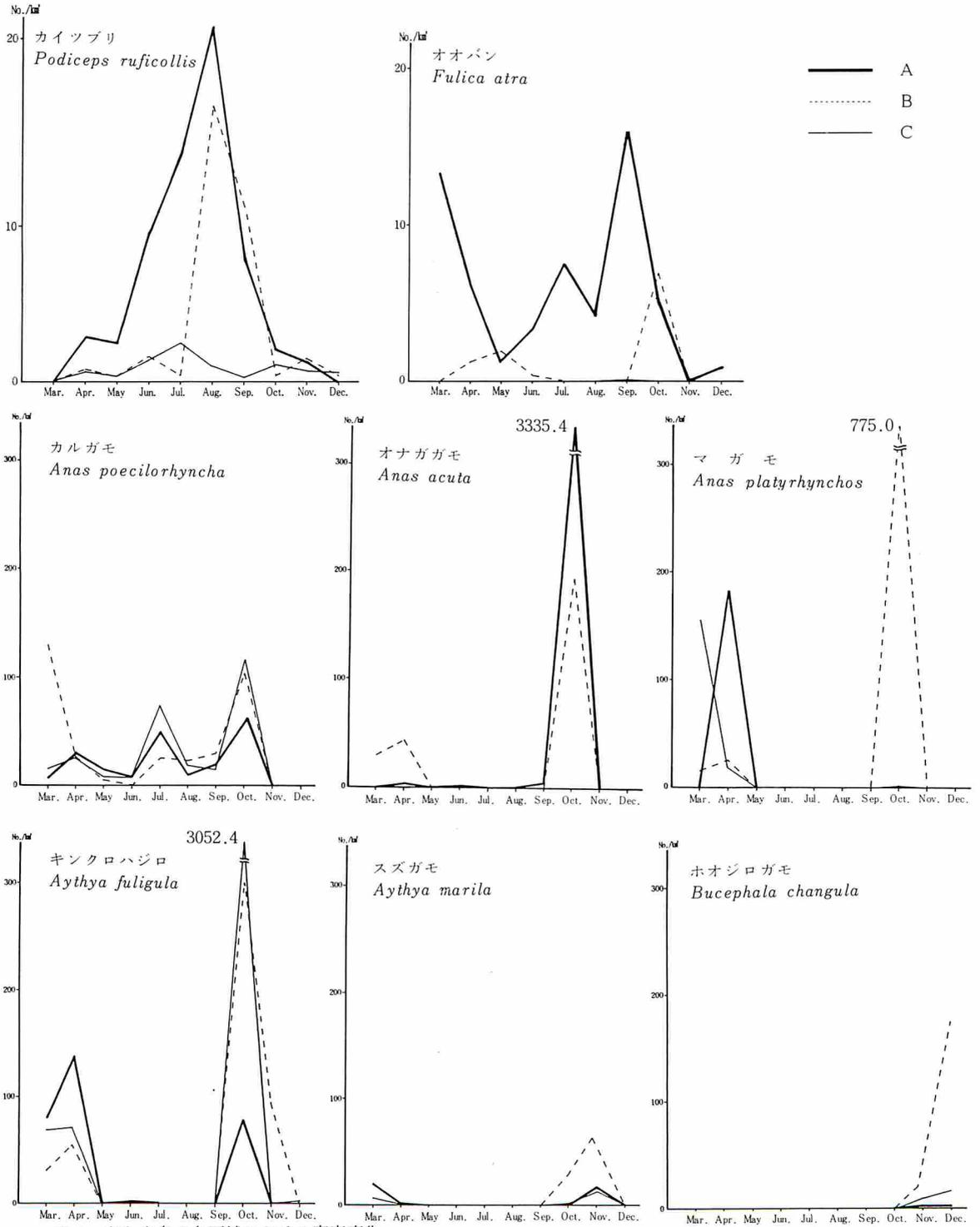


図5 主な水鳥の各区域における密度変化
 Fig. 5 Monthly changes in the density (No./km²) of some water birds at each investigated area.

し、ヨシなどの湿生植物が広範囲に繁茂しており、両種がこの湿原状の水域を繁殖地に行っているためと思われる。また、5月に減少傾向があらわれるのは、抱卵もしくは育雛などの繁殖行動が密生したヨシ原の中であるため、観察されにくかったのではないかと考える。

カモ類については、カルガモ、オナガガモ、マガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモの6種が、特に冬期間優占するので、個々にその動態を検討した。カルガモは、調査地内でも少数繁殖するものの、多くは周辺地であり、当地には採餌もしくは休息のために集結するようである。繁殖期外のようにも含めて各区毎の月別密度からみた分布のようすは、いずれの区も同様の傾向を示している。つがい形成期と思われる3月はB区が高密度である。

オナガガモは、渡来期である10月にはA・B区に集中し、特にA区が高密度になっている。渡去期は、10月に比し個対数は減少しているものの、再び集結傾向をみせ、B区に多く集まっている。

マガモは、渡来期にB区が高密度になるが、渡去期は、3月にはC区、4月にはA区と一定せず、その時の状況により集団で移動しているようすがうかがわれる。3月の個体数は、当月の全出現種中、最高値を示している。

以上の3種は、繁殖期のカルガモを除くと、大群で集散する傾向がみられ、しかも採餌場所が岸近い浅瀬ということもあり、漁獲などの外圧の影響をまともに受けやすいと思われる。また、これらの3種は、11・12月の狩猟期にはほとんど出現していない。

総出現個体数が最高値を示すキンクロハジロは、渡来および渡去時に高密度となり、特に10月は、最高値である22,638羽を記録し、C区に密集した。狩猟期にはいり、一時その数が減少するものの、狩猟期終了後に再び集結する。その個体数は、10月にはおよぼないが、3月には757羽、4月には973羽を数えた。渡去期の分布は、密度の高い順にA、C、Bとなるが、ほぼ全域に分散している。なお大群でしかも主に湖中部で確認されることから、調査地外のB区南側に大群で点在したカモ類のほとんどが本種ではなかったかと類推している。

スズガモ、ホオジロガモは、主にB区を生活域にしている。前種に比し、大群を形成することが少なく、小

群でしきりに潜水しているのが観察された。なお、ホオジロガモは、11・12月と狩猟最盛期にいたっても個体数を増加させた数少ない種類である。

要 約

1. 八郎潟調整池北部の鳥類に関する調査は、1・2月の結氷期を除く、1986年9月から1987年12月まで行われた。
2. 調査は、調整池北岸の堤防に沿い、大潟橋から南部排水機場までの10km間を、1km毎に定点センサスし、実施された。
3. 調査期間中に確認された鳥類は、主に湖面およびその上空で認められたカイツブリ類、ガンカモ類、カモメ類などの5科28種、主に湖岸で認められたサギ類、シギ・チドリ類、トビ、カラス類などの13科29種、主に堤防際の草地で認められたキジバト、ヒバリ、カワラヒワ、ムクドリなどの12科17種、合計25科74種である。
4. 調査地内の留鳥は、カイツブリ、カルガモ、オオバンなどの7種であり、繁殖種は、カイツブリ、オオバン、ヒバリなどの10種である。
5. カモ類は、淡水性の6種と潜水性の8種、合計14種である。
6. 10月から4月までに優占する主な種は、10月のキンクロハジロ、オナガガモ、11～12月のスズガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、3～4月のマガモ、キンクロハジロ、カルガモと、すべてカモ類である。なお、カルガモは、ほかに5～9月も優占する。
7. カモ類を渡来期と渡去期の個体数で比較したとき、渡来期出現型とみなされる種は、オナガガモ、ホンハジロ、キンクロハジロ、カルガモであり、渡去期出現型は、コガモ、ヒドリガモ、両期出現型は、マガモ、スズガモである。
8. 出現種数は、調整池西側の北部（C区）が多く、全出現種数の89.2%に相当する23科66種である。また、密度は、東部承水路南側（A区）が高く、1km²あたり4,604.2羽である。
9. 種別にみた分布の状況は、一様ではなく、繁殖地、採餌場所、休息地等の条件により、若干の偏りをみせる。

引用文献

- 秋田県野鳥の会編, 1972: 八郎潟の鳥類. 秋田県鳥類分布調査(1), 13-16. 秋田県.
- 秋田県野鳥の会編, 1976: 八郎潟干拓地の鳥類. 秋田県鳥類分布調査(5) (昭和50年度), 2-7. 秋田県環境保健部自然保護課.
- 秋田県野鳥の会編, 1977: 八郎潟干拓地地域の鳥類. 秋田県鳥類分布調査(6) (昭和51年度), 14-23. 秋田県環境保健部自然保護課.
- 秋田県野鳥の会編, 1978: 八郎潟干拓地の鳥類. 秋田県鳥類分布調査(7) (昭和52年度), 6-10. 秋田県環境保健部自然保護課.
- 井上晴夫・西出 隆, 1965: 八郎潟の鳥類. 八郎潟の研究, 204-225. 八郎潟総合学術調査会.
- 岸 通, 1985: 大潟村A40地区の野鳥. 秋田の野鳥, Vol. 17, 17-18. 秋田県野鳥の会.
- 佐藤磯男, 1979: ウミネコ繁殖す!! . 秋田の野鳥, Vol.11, 5-6. 秋田県野鳥の会.
- 渡辺 央, 1980: 信濃川大河津分水路域におけるガンカモ科鳥類個体群の季節的変動. 長岡市立科学博物館研究報告, No. 15, 19-32.

Ecological notes of the Avifauna in Northern part of Hachiro-gata Regulating Reservoir, Akita Prefecture

by

Ichiro TAKAHASHI

Summary

1. I investigated the avifauna and the ecological characteristics of birds on the northern part of Hachiro-gata regulating reservoir, Akita Pref. from September, 1986 to December, 1987 (except Jan. and Feb., because of Freezing Season).

2. The point census method was used in the present investigation. The point station was settled at intervals of 1 km from Ogata Bridge to the southern drainage station (about 10 km).

3. Twenty five families and 74 species were recorded. Of them five families and 28 species were observed on the lake, thirteen families and 29 species were noted at the shore of the lake, twelve families and 17 species were found at the grassland near the dike.

4. The resident birds were 7 species; Little Grebe (*Podiceps ruficollis*), Spotbill Duck (*Anas poecilorhyncha*), Coot (*Fulica atra*), Black-eared Kite (*Milvus migrans*), White Wagtail (*Motacilla alba*), Tree Sparrow (*Passer montanus*), Carrion Crow (*Corvus corone*). The breeding birds were 10 species; Little Grebe, Chinese Little Bittern (*Ixobrychus sinensis*), Schrenck's Little Bittern (*Ixobrychus eurhythmus*), Spotbill Duck, Black-browed Reed Warbler (*Acrocephalus bistrigiceps*), Great Reed Warbler (*Acrocephalus arundinaceus*).

5. Ducks were 14 species, in which six species belonged to the surface feeding ducks group (ANATINAE), eight species belonged to the diving ducks group (NYROCINAE, MERGINAE).

6. Main species of the dominants is all of the ducks. In October; Tufted Duck (*Aythya ferina*), Pintail (*Anas acuta*). In November and December; Greater Scaup (*Aythya marila*), Tufted Duck, Goldeneye (*Bucephala clangula*). In March and April; Mallard (*Anas platyrhynchos*), Tufted Duck, Spotbill Duck. And then, Spotbill Duck were predominant in species from May to September.

7. The ducks were divided into three types as follows; In autumn bird migration, the ducks increased in number were Pochard (*Aythya ferina*), Tufted Duck and Spotbill Duck. In spring bird migration, the ducks increased in number were Teal (*Anas crecca*) and Wigeon (*Anas penelope*). In autumn and spring bird migration, the ducks increased in number were Mallard and Greater Scaup.

8. Twenty three families and 66 species which is 89.2% in the present investigation were recognized in C section. The per-square-kilometer birds density of A section was 4,604.2. This was the highest density.

9. Judging from each species, the distribution pattern of living birds were not uniform. It is under the control of the breeding place, the feeding place, the resting place and etc. .